みやぎ生協　県内４ヵ所で被災メンバーと懇談会

みやぎ生協生活文化部は、ふれあい喫茶、こ～ぷのつどい、はん会・こ～ぷお茶会といった既存のさまざまな活動の場で、メンバーらからの声を集め、行政に伝えたり、生協の取り組みに生かしていく方針をとってきました。

しかし、国の第 3 次補正予算の議論が始まったことや、首長・県議懇談などに、被災されたメンバーの思いを伝えるため、県内４ヵ所のボランティアセンターで「被災メンバーとの懇談会」が実施されました。

亘理町にあるみやぎ生協亘理店集会室で
行なわれた懇談会の様子。

10 月 6 日に石巻（県北）、17 日に亘理（仙南）、気仙沼、28 日に仙台の順に行なわれ、それぞれ近隣の地域や仮設住宅にお住まいの方、大規模半壊ながらも自宅で生活されている方に参加を依頼し、主催する生活文化部の職員らが 90～120 分にわたって「今、何に困っているか、この先、どんなことが不安か」を、聞き取りました。17 日の午前、みやぎ生協亘理店集会室で実施された懇談会では、メンバー（組合員）4 人、そのご友人の方 1 人、被災した生活文化部職員 1 人の計 6 人が招かれました。

生活文化部の池町江美子さん進行のもと、参加された方々は被災時の状況、その後の生活、経験の中で感じた困惑を順々に話していきます。

地震の直後、どう避難したかは、実際に体験した方にしか話せない真に迫るお話でした。避難後の生活については、避難所に入られた方、ご親戚の家に身を寄せた方、その後は仮設住宅に入られた方、住宅を購入した方、アパートなどを借りることができた方と、状況はそれぞれ。また、仮設住宅という、名称上同じ場所に暮らしていても、地域や年代、家族構成が異なれば、置かれた立場、抱いている思いは異なりました。類型化しての対応だけではなく、できるかぎり個々のお話に耳を傾ける姿勢が、支援の基本となるべきではないかと詳しいお話を聞き感じました。

そのような細かな違いはありましたが、この日の参加者の皆さん抱く思いの共通項を挙げるなら「行政からの情報が行き届いていない」となります。

支援物資の配布や助成に関するルールは、避難所や仮設住宅で生活している人にはすぐに伝わるが、親戚の家などに自主的に避難した人には届きにくいという感想を多くの方がお持ちでした。市や町に聞きに行くと「ホームページに出ている」「登録すれば携帯電話にメールを送っている」という説明がされるようなのですが、「携帯からの PC 用ホームページ閲覧には費用がかかる。できるだけ避けているのに」「携帯電話へのメール配信の登録方

法がよくわからない」といった困惑を話す方も。

情報共有の遅れから「地震の直後に市より支給された生活支援金の存在を数日知らずにいた。知人に聞いて初めて知った」「1LDK なら助成が出ると知らずに 2LDK を借りてしまった」「申請が遅れ、助成金を受け取る前に住宅を購入することになった」などの事態も起きていました。

みやぎ生協生活文化部の池町さん。

また、親戚宅に身を寄せたり、近隣にアパートなどを借りた場合は、その地域に配布された支援物資は「当初より住んでいた方」に対しては配られるものの、「身を寄せている最も支援が必要な方々」への配分がないことも。“縦割り行政”の弊害に不満を抱く方も多くいらっしゃいました。

仮設住宅でのマナーについても意見が。「鍵を手にしたきり、まったく出入りのない人がいる。商売をしており店舗で暮らしていると言うが、ならばもっと切実に住むべき家が必要な人を優先するべきではないか」「部屋に備えられた家電類をすべて持ち去り、姿を消した人がいる」「定住していない人の分の支援物資を、すべて代理で受け取っている人がいる」などモラルの問題や、「子どもが走り回る音が騒がしいというクレームが隣人から来る。それは自分も隣人宅に感じることであり、お互い様だと思い我慢してきたのだけれど理不尽だ」という声もあり、解決策として「互いに許容できる『子どものいる家族』を同じ棟に集めるようなことはできないのか、という意見もでました。

また、あるお年寄りが仮設住宅の入り口で転倒し大腿部を骨折したため構造を改修することが決まったが「事故が起きてからの対応ではなく、予防に努めてほしい」という希望も。

仮設住宅を出てからの生活再建については、特に状況がそれぞれでした。移住を前提に競売物件などを探している方。「ご近所さんと別れてしまうのは寂しい」と、地区全体での移転について期待を寄せつつ、ただし移転先に商店や病院があるのか、交通機関は整備されるのかを気にかけている方。「行政の土地利用が見直されたことで、宅地が『災害危険区域』となり、新築が禁止になるらしく、土地を手放すことになるが、評価額は震災後の評価額となるため二束三文。移住は簡単ではない」と話す方。自宅に戻れたが、水回りが傷んでおり「直すには 1,000 万円程度必要」と言われ悩んでいる方。「今はまだ考えられない。できる限り仮設住宅に住み、子どもたちが成長してから将来を考えて検討する」という方。置かれた立場によって再建までの道のりは千差万別でした。

中には「もう何もないとは分かっていても、週に一度は家があった場所を見に行ってしまうの」と話される方も。半年以上が過ぎた今でも、気持ちを再建に向かわせることができている人は一部だと考えるべきなのかもしれません。